



門へ達 13
番 / 1840
巻

春
子
錦

春の錦



宋人有春宵秘戲圖此方有土左氏画卷則其末久矣藏之
書篋可以防火豈猥褻之謂乎樵山子來請題春画首因題
此語

蜀山人

德若笑萬歲

床若に五ばんせいとは君もさかんにましんます愛

敬有けるあら玉の年喰ひ娘のおしたては器量よしの
玉のかんざしかうべにさしあやまる足袋をはいて箱
せこの鼻紙を口にくはへ御用の物を手に持て室の君
の御寝間のあたりを見てあれば錦の夜著がご結構綾
の褥かご結構ごけつかうなお床をさらりやさつと敷
わたさせ給ひける御枕のりにはみす紙が一千帖笑
本が一千巻法華經のハの巻よりはるかぐつと有かた
い具足櫃の一の巻に人々の涎があまくたらせ給ひけ
り昔の春畫は野慕な圖今の枕は意氣な圖これを見て
やら厄神も七里けつかい逃出すべきだんひら物を握

らせ給ひけり一本の柱は帆柱丸二本の柱は阿蘭陀
線香三本のはしらは三職圓四本のはしらは四ツ目の
妙薬五本の柱は牛房に玉子六本の柱はうなぎの蒲焼
七本の柱はなまきすいき八本の柱は八味丸九本の
はしらは鯨のたけり十本の柱はおつとせい此物ど
の力をかりお御自身の勢ひにて二百文をはねかへし
エイといふて立られけるは誠にめでたう待ひける此
勢ひをみろく十年たつのとし諸賢の立たる御道具な
れば日は照れどる晝間もかまはず風を引てるそれに
もかまはず一年つるつてカ、ヲ千八百番の御いきほひ

目出度所を是からそろ／＼グッチャラ旦那様もお好キ
だがおかみ様もお好キ日本國が惠方の方からひとつ
によつて参る／＼／＼何か又参るお氣がたんと参る
白酒や練酒がだらり／＼と参るてゝの椀で五六はい
もとろ、汁をおつこぼしてうへのほうへぬりした
のほうへぬりぬりめいてこつころルちはよかん
べいそカヤレカ、おとつさまのかのおゆづり物のか
のき、らきんの金の字がべたつくべいぞグッチャラコヤ
グッチャラコヤ
お金藏にお米藏おまたぐらの表門が百間ばかりもお
つかだかつておつこらいて御子室がはいる御壽命長

えしつくりやてうど百萬番のおいはる

鶴太夫亀太夫をまねびてもとより此道すきやかし
の
狂歌堂の翁祝申

いまはむかしいみしくまらおほきなる男ありけりき
さらきのはつうまの日瀧野川のあたりをゆきけるに
しとのしたかりければ岡なる所に狐の穴のありける
を見てすそひきまくりてたちなから穴の中にしけれ
つその時藪垣のあひよりな、そちはかりなるうはの
杖にすかりたるか出きて此男にいふやうきてもおほ

まやかなる御まへの物かなうはとし老て侍れとか、
る御物はまた見侍りすといへは此男ほこりかなるお
も、ちしてさる侍らすいとちひさく侍りといふうは
おのれは此ちかきあたりなる長者の御むすめのめの
とにて侍り此御むすめいかなるすくせにかかたはな
る所おはしておよそむこの君十人はかりにあひ給へ
れとみな御こ、ろにつかすとおひいたし給ひきき
るは御ほ、の世にひろくおはせはおほかたのまらに
てはみこ、ろゆかぬけにてはへりわきみむこになら
せ給は、ふきはしからんといへは此男うち名みてお

のれは午のとしにうまれて名をも馬とよひ侍りうま
れとしにあえてや重寶は尺にあまりて侍るといふさ
てはよきむこの君なり先うはとつれたちてかしこに
いたりてさうしみのさまをも見給へといひつ、いさ
ちひてあせつたひをゆく道のほと五所はかりをへて
大なる門有門をいれは竹垣しこめたる所ありこ、に
またせ給へといふくうははおくの方にいぬ扱むこ
にまつほといひさしくて日くれぬ竹垣を覗みれは
主のむすめとおほしくてみめよくあてやかなるかほ
かけによりふしたり女はら四五人かたへにゐてうち

かたらふさま也むすめよへいと大きなる松茸をのむ
と夢みつといへはめてたき御夢なりなといひはやす
時にかのうは出きて娘か耳に口さしよせて何ことを
かかたらへはむすめむ、とわらひて竹垣の方を見お
こせつ、あなたなる方に入ぬ馬はあからめもせすま
ルりぬけにまらは石のやうになりてうつし心もな
く立ぬたるにうは再出きて馬か手を取りてしをりと
より入てすのこにのほせつさてひとまなる所にゐて
ゆきて戸をきして出てゆきぬうちみれば屏風引まは
してありやをりおしやりてみるに娘た、一人ふしを

りうれしくてやかてひた、礼か、けてはひれば女は
ちらふけはひルせすつといたきつきて口うちねふり
つまみ口つき此世の人とルおほへす手をやりてまら
をよくるに男こらへすした、か物をつふりとつきい
れつ女あしをくみの上までさしあけてもろてをせ
にかけたよ、となきいたす男いらなし尻うちふりつ
、ひたりやつ右こ、のつとつきたつるさま伊豫のゆ
けたもこ、もとにあるこ、ちす女あなよや〜とい
ふ聲やうやくよはりゆきてはてはいきのしたにてう
つ、なきことをそいふふすまのうへはふのりをこほ

したらんことくそこら海となりぬおよそ七たひ八た
ひまきつとおもふほと耳のルとにてこはそルなにか
とそといふ聲さやかなるにふとこ、ろつきてかたへ
をみれば友たち三四人つとひてたてりまはゆくてう
つふしに成て女をみればあなねはすや女と見しは
大きなる樹の横に卧たるにてそれかふしの穴にまら
をはきしはさみてゐたるなりけり長者か家と見つる
はむくつけき杉のはやしにそ有けるさてはいはりた
れつる穴にすめる狐のかくはかしつる也とおもふに
くやしさいはんかたなしすへて夢のやうにてあとは

かなく成ぬれとた、まらのみ化されつるなこりと、
めて臍のあたりにおこりたちてそある友たちとるう
ちみて木のふしにいれてぬきさしあり、かにしつる
まらの聊の疵たにつかすそこなはれさる事こそいみ
しけれ命めてたきまらなりといへは馬うちうなつき
て

よりともにあたまかちなるまらなれは

ふしきの穴に入れとまつたし

とへらぬていにいひなしつ、王子のたいこのおとに
まきれてあしはやに出ていにけるとそかたりつたへ

たる

桃櫻ひなの宵君

雀海中に入て蛤となり娘圍中に入て華嫁となるむかし
し／＼神代のむかしをのはじめかの所にあはせ玉ひ
あな意よやのむつごとより今末の世に至りては離も
て遊ぶ由縁成るらんさればおほけなくも内裏離と
やまひ或は古今萬歳離と祝すあまさがるひなには善
次治郎左衛門おぼこの名ありいづれ夫婦陰陽和合の

二柱をたて男と女と豆いりき備ふ二丁三丁とぼすら
うそくもふせん／＼といへど数の多きを好みひし形
りの餅を見ては女離をおもひ御厨子黒棚の黒き物を
第一の上作と譽る金屏風のひかりには鴈をゑかき鴛
鴦のふすまをかきね夜具に枕をならふれば琴はたて
にし三味線は横にする臺子にとんだ茶釜あれば茶か
すも榮耀の一ツなるべし誰も道具のりつはなるこそ
めさましくもをほゆる顔に櫻のうす紅ひをあらわ
し花生あらく柳髪をみたす桃のあたりへ白酒のこぼ
れか、らむ風情ひのろをかかきについはやしか

たどふもくア、よい彌生の雛祭りおめ下たきもの
蘭奢の薫りだんくかさなる曲水の忍ん御香箱の開
け口粹もやほもおしなべて日本國かひと所えよるも
ひるも喜見情のたのしみに重詰の赤貝もまた床の海
汐干漚ちりもあくたも華貝やへその磯邊の磯せり
はおもしろからめをかしからめや

初戀の妹脊は伊勢の鸚鵡石

可愛といえはかあいとそもふ

東都滑稽作者

立川談洲樓馬馬

行年つもつて七十歳いまだてうちんで草餅をつ
かお嗚呼つかもなくおやして述

男莖形ヲハシカタのなきいにしへは伊勢肉具ニシの名のみ高かりけ
ん陰戸形アツマカタのなきそのかみは築紫陰門ツキムラサキの味のみの慕ひ
にけむ彼は野の宮の繪巻物袋法師の物語など世にも
てはやせしころほひなれは真玉手マタマテの玉手さし巻とよ
めりしむかしくにして抱つくと唱ふる今の代のさ
まとははるかにことふりたり相模女に房州鍋とかい
へる玉門の名たゝるものは猶後の世に出きにたれど

いつこもおなし玉莖たまきの味ひいまだ何かしてふ名をさへ
へまかすこゝにものせるたはれ繪のこゝろを探るに
みやこはよろづの物おのづからやはらぎたれば殊に
やはくむにくとして名に流れたる京の水其潤ひ
もさこそとはおるひやられぬた、郭公はまきく人も戀
を催すよしいふなれば妻戀の音に心うかれてかの所
を見る人の心の内やいかならんさが父に似てなかつ
ともさが母に似てどこやらも卯月なかげのしのび音
をわれにはゆるせといふなるべし春三みすびして夏六
は此月よりまさり秋あき一いつむしかへしてのち無冬むとうの月

令を用ゐず食ふて毒をしり時珍か物産家にあらねは
嘗て能をせとる神農の本草家にあらずこれを唐山の
王昌齡は遥望玉門関と賦し我々の國の三條殿はあふさか
山のそれならで京のおやまのさねかつらとなんよむ
べかりけるおのれはそれにひまかへて例のつたなき
たはれうたをよめるその歌

なけまかう京の女郎の文彌ふし

き、にきた野のほと、きす程

於江戸本所小築

式亭三馬戯贅

落はなし

祐成かこゝろをかけし虎といふ女は大磯に帰り高麗
寺の山のおくにとちこもると曾我物語に見へたも
五月の雨のふさぢの辨ふるといふも遊女のほりまた
ふん流すといふも居つゝけの通言なりむかしは大い
そにも仲町の情あり今や江戸の辰巳に糺坂の出ばし
あり奇場横丁のよせてはかへすぢみ枕迎の船の掉
す音に別れをしらすきぬくをこまやかに画師は其
始末を筆につくすされは少々かやらすの雨の草摺に

すかるきはなせ留たのむつ言よりはてはこゝろを廻
し枕氣のみしか夜の時宗かたゝくといふも水鶏にあ
ける八まん鐘ほれた男の無理ならはむりを無理とは
いははしの夜のちきりやさそならん

夜討曾我の謡に有

あらものくしとわたかみつかんでゑいやくと
組こゝろんで時宗上になりける所を下よりはゑいや
と股押上るとアリ

拍子にかゝり戯言をものすれは人ありて時宗の床の
戦強かりけるはいふはかりなし兄祐成もことふつよ

くあふらんと問れたるときましめに成て曾我物語に
は祐成はたつた十番きりと言てわらひ／＼筆を掌る
者は

東都落語作者

芝櫻川慈悲成

祐やすは角力取草時宗は

かや釣くさのうち取組

むきしとしもふさのあひたにいとおほきなる川あり
それを角田川といふその川に舟を浮めて白きはぎの

足とおしとをかみあひたる京にはみなれぬ江戸藝
者涼みとりながらの氣ばらしを是なん御せんどりと
いふ

す、風の手まてぬれけりもつとおくを

つくはに富士のこしをつかへは

舟こすりて鼻いきあらくなきにけり

舟涼し橋のしたとふかはほりと

みなみな月の夕かけの不二

尚左堂俊満戯墨

清少納言か枕の草紙に遠くてちかきものにいふなる
をところをうなのなかこそおかしけれからうたに鄭を
の調あれはやまと歌にはもとよりもつはらにしてな
か／＼し夜の文月に萩の上風とはぬきうらみみしか
夜の蚊やの月に有明のわかれををしむたかしのはま
のそらいびき我手まくらのためきねいりもおつれは
おなじ谷川の水をへらすたねなりかしやすらはて
とうらみたるほ、さきの赤深右衛門あれは今ひとた
ひとすへ膳するなさけの水の泉式部ありつめりしお
との紫式部はめぐりあひたる口説にしてほきぬ袖た

にとなきいたしたるは相模女の出會なるへしさてし
も歌はかりかは連跡は万化にくたけてもの自由の
はたらきあれは井筒かもとのうなひ子の手まりもら
ひしなすけわすれす源内侍の十夜参りは紅うらにう
き名をたつらる逢ふのまつのうらむのわかる、のと
戀を一句てすてぬぞかしされはかの法師か筆にも嫁
はさかりに妻けうまなまをのみ見するものかはとはい
へるきや玉のさかつきのそこらあたりち、と見へし
かきねのそとの行水にあらぬうき名をちかし蚊をや
く紙燭にいねわすき姿をさしのそきておもはぬあた

まをはりる、なんとこそいろこのむとはいはめお比
丘尼の虫干に似氣なま文のたんすからいでしるこし
もとの花かんさしかわか旦那のへやにおちてありし
もみな此みちのたのしみにして時に善悪のあげつら
ひはあらなくもわきてはつ風す、しく吹いて、秋の
夜の長きころ萩のつゆのたくさんなるこそこの事の
秋とはいわめ

をりひめもとしいちとの萩の露

おくくといふはつ鴈の聲

山東京山戲識

紫微宮の玉の床二星雲雨のこかねのまくらいつれは
あれと年もまた三五夜中のたのしみはさゝらえ男を
みなへし人間界にしくものなし玉兔の白も杵なくて
は鳩せんとするに得もつかれす吳剛か斧も柄をとら
ねは臍の下へ當られすあつま遊ひの吾妻形みか、て
清き輪の玉細工はしなく造化の巧つまる所はこの
道ひとつ昔もかくやもるこしの常娥長命丸を盗て天
上までもちあげ玉母もる、をはたけて世界ひとつに
あつまるといふ鳴乎よい月のまん中をつくく見れ

は誰も氣か郁々乎たり東籬の秣また含たるをとの菊
これそ葉月のはつ物ならは玄の亦玄玄北の門なるへ
し

嗚呼よやと下から聲をからせとる

晴てはさ、ぬもち月の影

飯台狂夫醉墨

長月のさかり山路の菊見ゆく程にかけルおもはぬ仙
窟ありぬしやたそ世にしら露の眞をたつねて困ひけ
んとおほえ句ひこほる、玉菊の花の顔はせかいま見

てよりよそにたましひをけたれ蘭菊の籬かもとに立
帰るへき家路を忘れぬこは山鳥のそ、のかしたりや
そも我からはつ霜のおままとはせるこ、ちすらしも
夕露に乱る、花のうしろ面

狐いろなる黄きくしら菊

八十一翁

三院羅

大江戸のすきやまちてふあたりにふしまりのぬしよ
りといふ人ありいにしへぶりの歌の道にたへにして

又色の道にもかしこきのみならず骨いと強うし
ていくはくのた、かひをなすとも弱はる事無きすま
人なりければ不死陰莖とはいひけり此家の近きあた
りにさせ子といふをとめ有年は十五ばかりなりか彼
飯よりが許に來りて歌よむことをならひけりある時
めし頼がいふやう歌を能くよまんと思はば先おのれ
かいふことに隨ひて人たらん物のなすわざを覺えよ
とて近くよりそひつゝいと清らなる手をとらへ細き
目もとに色をふくめてたはれけるをさせ子は物いは
ぬ花の色なる顔してやをら手をふりはなちて

しきしまの道こそまなべをさな子の

みとのまきはひ何ならはまし

とよめりけるをめしより又袖をひきとめて

うましこと何うき橋の神たにル

とつぎをしへし鳥にならひき

八つになれるをさな子の子をうみたるためしなへあ
るきとていだきよせてみたにの底へ手をさし入たる
にぬらゝとぬめりわたりてぬなはのあつるのをさ
くるに似たりければこそあらめとて飯より

あら海のあらならめやはくじるにぞ

鯨のうしほふきルふきあへぬ

女はじめの詞にも似なく吹上の濱に吹たつる風のや
うに鼻息をあら、げつ、飯よりをいただきしめて同し
紀の海にはあれど

わか浦の道をたかへて鯨よる

熊野の海になどそひけん

これをなれそめとして此後はしばしば通ひ来りて和
歌の事はさし置いて只むつことのみと思ひ乱れつ、た
らちねの親のめをしのびて夜ふかく通ひけり晝は人
目のしげきま、にくじり口吸ふなどにやありけらし

たま／＼當座の歌もよみぬれど定れる題にはあらで
いと興じたる題をかたみに作り出てそよみける此う
たあまたあれど其うち只三首をこ、にしるす長から
んことを欲する戀といふ題にてさせ子

すかの根の長くもかなと思ふかな

早くちやりそあくよあらなくに

又よがりする戀といふを飯頼

君かため右に左に上に下に

ふかき浅きの手を盡しつ、

又よかりにたへける戀といふをこれも男

しまたへの枕はづしつ乱髪

なく聲高み死ぬといふ也

又ある時かたみに氣をやりて後飯より

玉の汗に猶やり水の音そへて

はらと／＼につゝみうつ聲

これを聞て女

鼓うつこゑをしひとのとかめなば

ひきはなれつゝ狸寐にせん

亦ある時こよひもしのびて通ひ来らんと契り置ける
に其夜は父母の夜更る迄いねざりければえぬかざり

けりつとめて男のかたより玉づきもて恨みいひおこ
しつ女の方よりもせうそこしてたかひに文のはしに
歌よみてやれりける

よべ君にへだてらるればあでかきの

皮つるみしてうさをしのびき

女の方よりはかくこそ思ひぬれとて

水とちりしちぎりほうしなみづうしの

つのもて作る玉くきルかな

夕つかた又かたみに此歌の返しを

わか玉のかどにもいれずよきことを

しきの羽根がまかきルすてしか

といひおこせり男も又恨をふくみて

みづ牛の角もて作るうつはあらば

わか玉ぐきも君はたのまし

かくひそかにしる深くかたらふことを親も聞つけて
させ子を飯頼が妻に贈らんと云やりければめしより
な、めなりずよるこびさせ子はいふも更にうしろや
すくいもとせのかたらひをなして榮けりとぞん

文化のこゝのとせみづのえさるの神無月

七十まり八つにたれ

手からのをか持しるす

翠簾家体のおほみや人は全屏の冬簷に霜の袴をぬき
すて、鴛鴦のふすまにつはさをなりへ田舎歌の賤か
ふせやはみぞれ酒の一盃機嫌に木枯の枝をつらねて
帝子さはりのありきをいとほす二番目の夫婦いさか
ひみせすか、まの茶屋場はさらなり加田の權立浮身
やと比丘尼蓮葉女伽やらふむしやうにのほる張子の
山のた、すまひあなうましといへるふき水のめいほ
くいつれか戀にありさるへき花道に降三角の雪のは

たへのめくめ鳥幕かおそいとゆふ月の待夜はつらき
浮寝鳥挑燈てつく冬至の餅寝てあたゝまるふくと汁
青竹から降る雨となりうへかりつるす雲となる狂言
綺語のわさをきル三分晝夜の太夫棧敷にたれかよた
りをなかせさらめや

年の内に春をむかふる顔見せは

目に正月の事はしめかる

山東京傳

花のおほる月の紅葉涼しきゆふ暮の螢よりも分て圍

中の千鳥焼に玉子酒のかんさましには及ふるのかは
されはこそ永き夜の鐘もみしかくおもひ手をましゆ
るきぬくには結ふの髪も脊中ておかむやうになり
静なるあかつきをおしむるのからとし暮の世話し
るよそにわする、は雪の夜の徳なりめ豊年のみつき
といふもむへなるへし奇々妙々

しつぽりとつもるとしまの雪の肌

とけてあふ夜は價千金

櫻川甚孝書

十二月每文有圖畫彩精密未得其工因先刻其文後其
圖云

淇澳堂主人

3
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

